空に連なる地平(1)

津守　真

これまでの惰性的な思考からはなれて、自分なりに新たな思考法をはじめたとき、私は日々のノートを新しくし、「生命過程と精神」と表題をつけた。古いノート、しかし、そのときには新しい思考法に思いきって自分なりの歩みを進めた記録である。

それから四半世紀を経たいま、ますます、子どもが生きにくい時代になった。子どもたちの笑い声が街角に溢れるような、保育の実践と学問がいまほど求められている時代はない。こんな古いノートを取り出すのも、いままた新たに幼児の仕事に踏み出

そうとする私自身の心の願いからである。

生命過程と精神

子どもが自分から遊び始める前に、だだをこね、互いにぶつかりあう混沌とした時間がある。

精神が生まれる前の生命過程では、人は何かしたいのだが、それが何かをはっきりつかめない。そこに現象している自分は、何かもっと本当の自分を、もっと自分でも満足のいく自分自身を探し求めている。子どもは、それを探すために、物に向かい、人に向かう。その途中のひとこまが保育者にぶつけられる。そうしながら、自分の打ち込めるものを見いだしたときは、すなわち精神の出現の時である。この点で子どもも大人もかわらない。

逆に、その途中で、ある一面だけが抽象されて子どもに与えられ、それが子どもを支配しはじめると、生命過程は断ち切られ、精神の出現が阻害される。このようにして、どんなに多くの精神の出現が阻害されたことであろう。

一九七二年六月十二日

並木道

銀杏の並木道を歩いてゆくと、良い気持ちである
タクシーに乗ると損をした気がする
落ち着いて　考えられるような感じ
考えが進みゆく感じ
そのとき　いつも　私は　何かを一歩深めて考えている
だが　これといってまとまったことをではない

並木道は垂直の木の連なりである
それがまっすぐに見透かしてみえる
そこを歩いてゆくとき　私も並木の一本である
並木そのものが歩んでいる
その根は下に張っている
だから電柱の列とは違う
私は地に根を張り　天に向かいながら

並木の一本になって歩んでゆく

何かまだ言い足りない
並木道は　言い足りないその部分を　背後に含んでいる
それらの総体をふくみつつ
並木道となって私にあらわれる
並木道を現象としてみたとき　それは人生の象徴である
その象徴にふれて　私の中にイメージが湧き起る
私が自由なイメージをもちうるほど
私はその知られざる部分に　少しずつ
気付いてゆく

この日の午後、Kくんは、冷蔵庫から自分が出してきたグレープファンタを飲みたいと泣きわめいた。家から持ってきたグレープファンタでもなく、私が戸棚から出してあげたのでもない。だれか他の子が持ってきたものだから、私はそれを押しとどめた。Kくんは私を引っ掻き、噛みついた。実習生のTさんは、Kくんは冷蔵庫から出した新鮮なジュースが欲しいのだ、その感覚を重んじたいと主張した。F先生は、こ

の次からジュースをもってきた人は冷蔵庫に入れておけばと提案した。子どもの思いを親や保育者たちと共有するためのF先生の実際的な知恵である。Kくんの新鮮さへの感覚、それを阻止された残念さが、泣きわめき、引っ掻き、噛みつく行動に表現されたのであることを私は知った。

新鮮さ。それはこの子だけのことではなく、人間の心の深くにある共通のイメージではないか。

一九七二年七月十三日

*

この当時、私は、ルードウイッヒ・クラーゲスの「生命過程と精神」について考えていた。

国立教育会館で行われた国際心理学会で、オランダのエディット・フェルメール先生に出会ったのはこの年の夏だった。

先生がクラーゲスを人間学の源流に位置付けておられるのを知って、私は心強く思った。